

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## キムチ・ナショナリズム

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝倉, 敏夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4563">http://hdl.handle.net/10502/4563</a>

一九八五年韓国では、「キムチ主題曲」という歌が流行った。「万一金ムチがなかったら」に始まり、「キムチなしでは生きていけない、ほんとに生きていけない」という歌詞が軽快なリズムのつてリフレインされる。

韓国社会は八〇年代の後半から外食産業が隆盛となり、ハンバーガーやピザといったファストフード店が生まれ、子どもたちの「キムチ離れ」が始まったと言われ始めた。そんな折にこの歌がだされたので、はじめは子どもたちにキムチを再認識してもらおうという歌のように聞こえた。しかし、この歌が日本名「竹島」の領有権を主張した「独島は我らの地」の作詞・作曲・朴寅浩、歌手・鄭光泰というコンビによって作られたことを考えると、まさに「キムチ・ナショナルリズム」の始まりを告げる歌であったように思われる。

その翌年、ソウルでアジア大会が開催された一九八六年に、プルムウォンという食品会社がキムチ博物館を設立する。そして

# キムチ・ナショナルリズム

朝倉 敏夫 国立民族学博物館教授

(あさくら としお)

1950年生まれ 東京都出身

専門分野 ● 社会人類学・韓国社会論

著書 ● 『世界の食文化① 韓国』、『グローバル化と韓国

社会—その内と外』(共編著)、『くらべてみよう! 日本

と世界の食べ物と文化』(共著)、他

オリンピックの開催された一九八八年には、韓国総合貿易センターの中に移転し、韓国を代表する食品としてキムチを世界に普及するための広報が始まった。

しかし、これは民間によるものであり、国をあげて世界にキムチを広報しようという動きが起こったのは、ある新聞記事をきっかけとしてであった。それは一九九三年五月一日付けの『韓国日報』の記事であった。そこには「世界市場に輸出されているキムチの約七〇%が日本製品」と書かれてあった。その真偽は定かでないが、キムチの宗主国である韓国にとっては衝撃であった。一九九五年には韓国のテレビ局が日本にキムチの取材にきて、第一部「キムチの逆襲」、第二部「キムチの独立宣言」と題して、八月の光復(解放)特集番組で二日にわたって放送した。また、この年の一月、農協が農業博物館の後ろの中央会館別館に、講義実習室を完備した「農協キムチ弘報館」を開館した。その翌年の一九九六年には、ソウル・オリンピックのコーデ



本人読者に説いている。

こうして日本に向けての対策は一段落するかに見えたが、続いて中国産キムチの輸入の増大という中国からの脅威が韓国を襲ってきた。韓国のキムチの輸入は九〇年代後半までは年間一〇〇トンにも満たなかった。それが二〇〇〇年に四七三トン、二〇〇一年に三九三トン、二〇〇二年に一〇四一トンと増え、二〇〇三年には中国産キムチが、台風と重なった雨によって作況が悪かった国内産よりはるかに安くなったため、一挙に三万トンにまで急増したのである（『中央日報』2003.10.20）。二〇〇五年には中国産キムチから寄生虫の卵が見つかり騒動となり、輸入量が減少したものの、二〇〇六年の上半期はキムチ輸入額が輸出額を上回り、ついに韓国は「キムチの輸入国」になったのである。その後も二〇〇七年には中国産キムチが二二万トンにまで増えているという。韓国人が一年に食べるキムチは一五〇万トン、中国産が国内消費量の六分の一近くを占めるという話になる（『中央日報』2008.11.28）。

こうした中国産キムチに対して、韓国では本場の味と安全性を示すとともに、機能

性の高いキムチや、キムチの効能を活用する研究を開発することで、対抗しようとしている。もともと中国でキムチが食べられるようになった契機の一つに、キムチがSARSに効くという風聞にもあったというが、「キムチの酵素を含ませたフィルターで、鳥インフルエンザウイルスの増殖を弱めるというエアコンを韓国電機大手のLG電子が開発した」（『朝日新聞』2006.2.24）とキムチの薬効を宣伝する。また、キムチの宇宙食も開発されたが、「韓国初の宇宙飛行士は、宇宙空間でキムチ乳酸菌を利用した抗がん剤や幹細胞成長促進剤の開発実験を行うことになる」（聯合 2006.6.16）というニュースもある。

韓国社会は都市化や産業化が進み、多くの人々がアパートに住むようになり、家でキムチを漬けるよりも買って食べる人も多くなってきた。また、キムチ冷蔵庫の開発により、いつでもおいしいキムチを食べられるようになり、かつては越冬用のキムチを大量に漬け、冬の風物詩であったキムチヤンもだんだんとその規模が小さくなってきた。しかしながら、韓国人にとってのキムチは、いまでも「キムチなしでは生きてい

けない」ものである。

韓国社会におけるキムチの変遷を「匂いは悪いが、食べずにはいられないもの」から「匂いが悪いことは悪いが、健康によいもの」、そして「健康によく、環境保護次元でも正しいのみならず、味のよいもの」と表現した韓敬九は、その論文の副題に「キムチと韓国民族性の精髓」と記している（「ある食べ物考えるによい」『韓国文化人類学』26、一九九四年）。また、「キムチという素材が無窮な研究対象であると着眼し、キムチを神秘的な科学の主題として接近し、深く研究してきた」金晩助も、「キムチは韓国人の情、恨、気に仕える食べ物だ」と評している（『Hi. Kimchi』(1024 Think 出版部、二〇〇三年））。

キムチこそまさに韓国人のナショナルリズムを昂揚する食べ物であり、ここ二〇年の「世界化」の中で、キムチ・ナショナルリズムはますます強化されているのである。

#### 参考文献

- 韓福麗 二〇〇五『キムチ百科―韓国伝統のキムチ二〇〇』平凡社  
朝倉敏夫 二〇〇五『世界の食文化① 韓国』農文協  
南相源 二〇〇八『世界の人々と共に食べるキムチ』Koreanal vol.15 No4 26-31頁 韓国国際交流財団